

こんぶくろ池通信

NPO 法人こんぶくろ池自然の森

Tel: 04-7132-8800

Fax: 04-7132-8806

Email: info@konbukuroike.com

URL: <http://www.konbukuroike.com>

2022年10月

第102号

主な予定

久保田先生

トラップ調査補助

9月30日(金)

10月1日(土)

きのこ観察会

10月16日(日)

10:00~12:00

コバギボウシ (キジカクシ科) の開花株数調査

上田 真佐江

目的：コバギボウシを指標にした、園内の湿性環境における生物多様性の状況確認。

※詳細 コバギボウシとキンランの開花株数調査は、2006年から現在まで継続されています。

[以下、2011年発行「千葉学ブックレット 都市と自然環境—4 市民の力で湧水自然を守る・柏市こんぶくろ池物語」より抜粋]

- ・ 湿性植物の代表としては、こんぶくろ池の希少種の中でもっとも個体数の多いコバギボウシを、コナラの優占する広葉樹二次林の希少種の中では、比較的多く見られるキンランを、調査対象に選びました。これらの種を代表に選んだのは、ある程度の個体数があり、生育の良いもの、悪いものなどがみられる種類でないこと、環境条件と生育との関係を知ることができないからです。
- ・ コバギボウシは、土壌水分率 30~90 パーセント、開空率 20~40 パーセントの広い範囲に生育していましたが、結実個体は開空率 20~30 パーセントに集中していました。
- ・ これらの結果は、完全に林冠が閉鎖した暗い林内ではなく、林冠のところどころにすき間（ギャップ）があるやや明るい光環境が、コバギボウシやキンランの生育に適しており、それ以外の植物の多様性をも高めることを意味しています。

調査区域：図1の北1~北5、及び図2の弁天池から橋までの水路兩岸。

結果と考察：開花株数は昨年度よりも減少（表1）。コバギボウシが群生し葉が茂るが花が咲いていない箇所状況には、大きな落枝がある場合（図3）、他の植物が日を遮っている場合、ササが生い茂った場合などが見られました。

これまでの経年変化を示した図4を見ると、園路の設置や拡張が開始されてから開花株数は増加しており、人の手が入り適度に明るくなることで湿性環境の生物多様性も豊かになったことが示唆されています。しかし、2011年3月の東北地方太平洋沖地震で放射能汚染が危惧されたり、2020年3月に新型コロナ緊急事態宣言が出て、保全活動の頻度低下や範囲縮小などの影響が出たと考えられる年度は、開花

株数が減少しています。一方で、湿性環境付近でスギ、シロダモ等の伐採を行ったり、地金堀の両岸でズミ周辺の下草刈りを行った後は、開花株数が増えています。

ナラ枯れや台風の大型化などで、落枝が増える傾向にあります。落枝の整理や、適度な伐採も、湿性環境の生物多様性維持には必要と考えられます。また、弁天水路の西側でササが茂ってきています。草刈り時期に、適度なササ刈りを行うとよさそうです。

	弁天湿地				北1～5(こんぶくろ湿地)						中央		合計
	北部	中部	南部	小計	1	2	3	4	5	小計	8	小計	
2022年	87	69	0	156	14	196	360	10	105	685	19	19	860
2021年	130	100	0	230	43	262	485	31	109	930	71	71	1,231
2020年	121	119	5	245	32	45	319	17	87	500	17	17	762
2019年	209	230	11	450	43	220	306	47	323	939	42	42	1,431
2018年	175	65	4	244	12	43	162	115		332	13	13	589

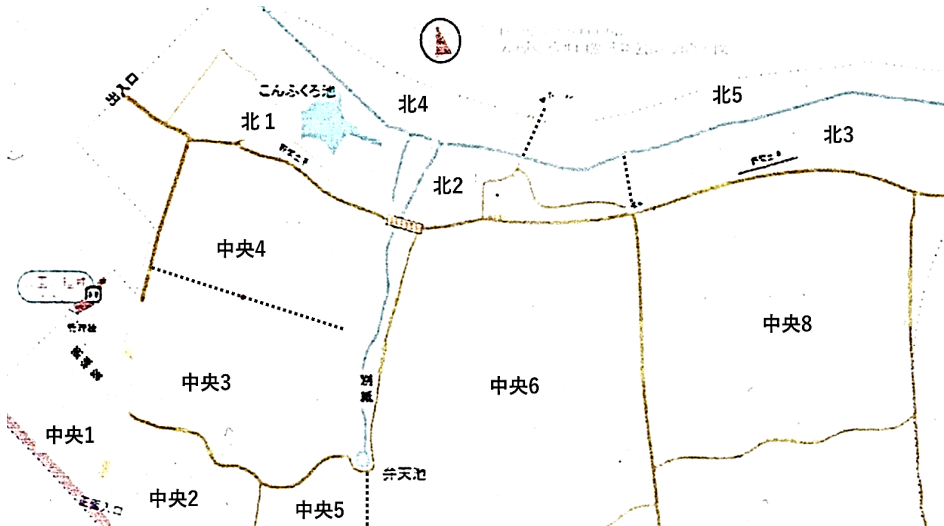


図1 調査区分(こんぶくろ池自然博物館北地区)

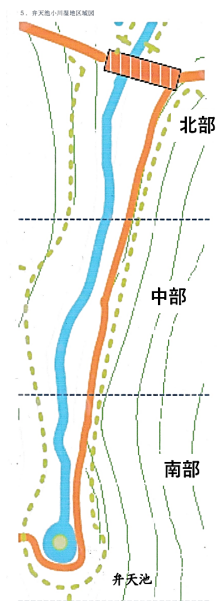


図2 調査区分(弁天湿地)



図3 群生するコバギボウシと落枝



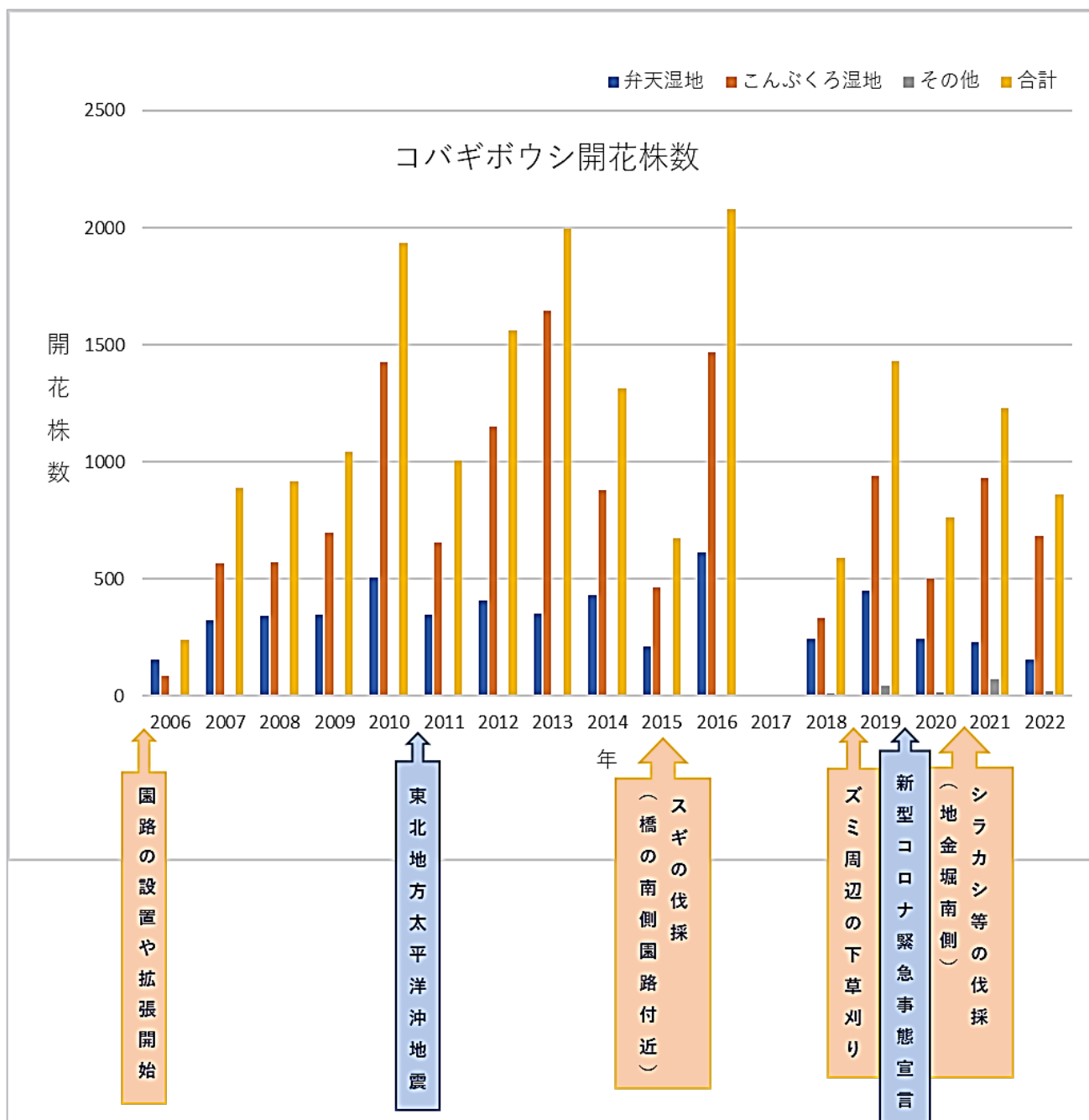


図4 コバギボウシ開花株数の経年変化

自然のいとなみ

橋本谷 弘司

人類は天変地異と戦い、さまざまな対策を行ってきましたが、自然の力には残念ながら抗しきれていません。近ごろは異常気象により大きな災害があちこちで起きていますが、ひと昔前にも大きな災害がありました。1959年（昭和34年）9月の伊勢湾台風では犠牲者が5,098人にのぼりました。犠牲者は32都道府県におよび、愛知県では3,378人が犠牲となり、高潮による水害が大きかったようです。

私は当時、大阪に住んでいましたが、雨戸が飛ばされそうになり家族総出で雨戸を数時間祈りながら抑えていたことを覚えています。

この台風を教訓として、1960年に愛知県春日井市高蔵寺の丘陵地にニュータウン計画が決まりました。当時の日本住宅公団の建築家・津端修一さんは風の通り道となる雑木林を残し自然との共生を目指したニュータウンのデッサンを何枚も描きます。しかし、時代の要請は大量の住宅建設であり、樹木を切り倒し、山を削り、谷を埋めて大団地を作ります。津端さんは失意のあまりしばらくの間、職場に顔を出さなかったこともあったそうです。

1970年、津端家は高蔵寺ニュータウンの集合住宅に入居しますが、5年後にニュータウン内の分譲地300坪を購入しました。それぞれの家が小さな雑木林を育て、新しい緑のストックをつくる実験を始めました。50種類の果実が実る雑木林に囲まれたモダンな平屋とキッチンガーデンでは70種類の野菜が育てられ月に1度、名古屋に行き、なじみの店で新鮮な肉や魚、足りない野菜をまとめて買い物をする以外は自給自足での生活を送っていました。

津端夫婦のドキュメンタリー映画「人生フルーツ」（2017年上映）では、樹木希林さんのナレーションが流れます。

“風が吹けば、枯葉が落ちる。
枯葉が落ちれば、土が肥える。
土が肥えれば、果実が実る。
こつこつ、ゆっくり。
人生、フルーツ。”

こんぶくろ池の森にも毎年枯葉が降り注ぎますが、森が枯葉で埋め尽くされることがないのは枯葉の下や土中の虫（ダンゴムシ、ミミズ、ワラジムシなど）が枯葉を食べるからです。これらの虫はウンチをします。ウンチはやがて土に戻ります。キノコや細菌もお手伝いをします。

私は実物を見たことがありませんが、「セミタケ」というキノコがあります。セミの幼虫は木の根の樹液を吸って数年間を土の中で過ごしますが、セミの幼虫が大量発生すると木が枯れてしまい、セミの幼虫も飢え死にします。そんな時にセミタケが登場し、増えすぎたセミの幼虫の個体数を調整します。セミタケは寄生菌の冬虫夏草で、セミの幼虫に取り付きその体内に菌糸を繁殖して養分を吸収し、ついには死に至らしめ、その養分でキノコを作り胞子を散布して、また他のセミの幼虫に取り付きます。

自然界は残酷ですが、不思議なことが一杯です。



セミタケの標本
(茨城県自然博物館の企画展展示物)

9 月理事会

(日時) 2022 年 9 月 24 日(土) 13:00~15:30

(場所) 管理事務所

(出席者) 議長 (理事長) : 岡本

出席理事 : 中川 (書記)、上田、徳永、萩原

1. 審議検討・確認事項

(1) (10/16 開催) 「きのご観察会」の準備状況について

- ・ 広報及び申込状況の報告を受けた。定員を大幅超過のため抽選になる。
- ・ 当 NPO の重要イベントであるので、事前の園路の草刈りや当日運営は NPO 全体で取り組むことを確認した。
- ・ 三井不動産に協賛及び支援金の依頼実施済との報告を受けた。

(2) (11 月開催) 「里山保全活動体験会」の準備状況について

- ・ 申込受付方法は、当 NPO 作成の申込みフォームからの申込みは NPO が担当、電話申込みは公園緑地課とする方向で、公園緑地課と調整する。併せて広報かしわ掲載文言も一部変更することについても公園緑地課と調整する。
- ・ チラシは裏に「体験項目」も印刷し、印刷部数は 200 部とする。

(3) 「(千葉学ブックレット) 池物語」増補版発注に向けての準備状況について

- ・ 今後スケジュールを確認した。

(4) (9/14 提出済) 来年度予算申請についての公園緑地課への最終回答について

- ・ 担当者よりの報告を受けた。

(5) 2022 カシニワフェスタ実行委員会結果報告について

- ・ 担当者よりの報告を受けた。来年度の取組方針は継続検討とする。

(6) 10~11 月活動計画

- ・ 協議の結果の情報を共有した。

(7) 10 月の通信記事

- ・ 担当者よりの報告を受けた。

2. 報告事項

(1) 園内ガイド

松葉幼稚園 (34名×2)

- ① (9/20 10:50~12:30) (橋本谷・中野・中川) 【悪天候のため延期】
- ② (9/22 10:50~12:30 頃) (川瀬・橋本谷・辻村)
- ③ (9/26 10:50~12:30 頃) (徳永・橋本谷・中川)

(2) 調査

東大 佐藤先生水質調査採水 (随時) (上田・川瀬)

(3) その他

- ① 東大 鈴木先生ナラ枯れ関連調査 (9/5~9・2名)
- ② 大貫遵子様より5万円の寄付 (9/18)
- ③ 管理事務所 PC の情報管理方法についての意見具申受領報告 (9/18)
 - ・ 新たに外付ハードディスクを購入し、データを整理することも含め、継続検討を行う。

理事会の議事録は管理棟のファイルにて確認できます。

編集後記

橋本谷さんのセミタケの話を読んで、地球温暖化によるシベリアなどの永久凍土の融解が止まらなくなるという話を思い起こしました。永久凍土の中には数多くの“未知のウイルス”が眠っているとみられ、実際に『モリウイルス』という高い増殖能力を持つ新種のウイルスが発見されています。さらにCO₂の25倍の温室効果を持つ『メタンガス』が大量に放出される恐れもあるとのこと。

こんぶくろの森周辺は最終氷河期の約2万年前の旧石器時代の遺跡が残り、縄文時代が始まった1万2千年前は冷温帯落葉樹林が広がっていました。約5~6千年前の縄文海進の際も北総大地のこの辺りは陸地であったとされ、ズミ、ヌマガヤ、ハシバミ、クロツバラ、クロウメモドキなどの氷河期の生き残りと言われる冷温帯の植物が残っているのは皆さんご存知の通りです。

しかし、温暖化が進むとこのような冷温帯の植物がこんぶくろ池周辺で見られなくなる可能性があるのはもちろん、地球規模では永久凍土内に閉じ込められていたウイルスやメタンガスが放出されると、地球上で人類が生き残っていくことさえ難しくなります。

セミタケがどういう要因で登場するのかはわかりませんが、人間活動による温暖化の進行は、自ら人類の個体数を調整するかのようには振る舞っているように思えてきます。(萩原秀夫)